

2023年4月23日 礼拝メッセージ

「神の前で神と共に神なしに生きる」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 24章 36-43節

「神の前で、神と共に、神なしに生きる」というこの言葉は、ドイツの牧師・神学者であったディートリヒ・ボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer, 1906-1945) の言葉です。彼は、第2次世界大戦中にナチスに抵抗したために逮捕され、ナチス・ドイツが敗戦となる3週間前(1945年4月9日)に僅か39歳の若さで処刑されてしまいましたが、それまでの間、獄中で多くの手紙を書き、その中にある一節です。「神の前で、神と共に」までは、今日でもよく聞かれる馴染みのある言葉かと思いますが、それに「神なしに生きる」と続くのは、まるで矛盾しているように感じてしまいます。どのようにお感じになるでしょうか。

以前、私が前の仕事を辞めて、神学校に行きたいという話をした時に、職場の上司から、「神だの、信仰だの、そんなものを軽々しく語るな」と言われたことを思い出します。その人がどのような信仰や思想を持っていたのかについて、私は知りませんが、曰く少年時代に戦争によって累々と積み上げられた遺体を前にした経験があったそうです。そしてその光景を思い浮かべながら、「それでも神を語ることが出来るのか」とのことでした。私自身は戦場に立った経験はありませんが、今でもウクライナやイスラエルを始め、世界各地で戦争や紛争は続いています。恐らく、それらの場所では、今もなお被害者が後を絶たず、前戦の様相というものは、それこそ100年前と変わらない悲惨な状況なのだろうと想像します。

なぜ、こんなことが起きているのか。神も仏もいるならば、なぜこんな悲惨な状況を野放しにして許しているのか。神も仏もあるものか。という状況や声は、今も世界各地で見られたり、聞かれたりすることでしょうか。戦争だけではなく、阪神淡路の大震災や、東日本の大震災を始め、台風や豪雨、土砂崩れなど、様々な災害もあります。それまでの生活が突然破壊され、町並みは一変し、待てども待てどもガレキの撤去は始まらず、様々なものが入り混じった腐敗臭が鼻につく……。地域の学校などが避難所や、遺体安置所になり、身元の分からないご遺体もたくさん並べられている……。そのような光景を前にして、私たちは一体何を語る

ことができるのか、言葉を失うしかないような場面というものが、確かに私たちの生活のすぐ側に、紛れもなく存在しています。

そのような時でも、果たして私たちは「神さまと共にある」と自信を持って宣言できるでしょうか。ボンヘッファーの先の言葉が遺されたのは、自分の力ではもはや状況を何も変えることが出来ないような、絶対的な悪を前にして、無力さに打ちひしがれ、絶望するしかないような状況の中でした。私たちは神様にお祈りする時に、「〇〇してください。〇〇になりますように」とお願いすることが、よくあります。そして多くの教会でも「神さまの御心に適うことは、必ず実現する。もしも実現しなかったのであれば、それは神様の御心ではなかったからだ。神様はあなたの思いを越えて、あなたにとっての最善を与えて下さる」と伝えて来ているように思います。しかし、本当にそうなのでしょうか。

大地震や津波、洪水で多くの家が破壊されることが、神様の御心なののでしょうか。人間が造り出した爆弾によって、多くの建物が破壊され、子どもも大人も殺されて行くのが、神様の御心なののでしょうか。神様はそれらの状況を眺めながら、人間の思惑を越えて、もっとよい世界、天国へと人々を導いているから、それでよいと言ってしまってもよいのでしょうか……。ボンヘッファーが「神なしに生きる」と言ったのは、「そのような人間が考えた神、人間が自分たちの都合に合わせて造り出した神なんて要らないし、そもそも存在していないのだ」ということなのではないかと思えます。

もしも、神様が私の願いを叶えてくれるなら、今すぐ戦争を止めて、戦争で殺された人々を生き返らせて下さい。大地震や洪水で破壊された街並みを元通りに戻して下さい。事故や病気で天に召された家族や友人をよみがえらせて下さい、と多くの人が願うのではないかと思います。しかし、神様は決して、そのようなビデオの「巻き戻し」「逆再生」のようなことはしてくれません。「全知全能の神様には、何でも出来るが、あえてなさっていないだけ。今の時点ではまだ、死から引き起こされ、復活させられたのはイエス様だけ」というような考え方から、そろそろ卒業下さい、とされているような気もしています。

今回の聖書のお話は、先週の「復活のイエス様がエマオで二人の弟子たちの間

に現れた」というお話の続きで、他の何人もの仲間たちが集まっている所に、イエス様が姿を現された、というお話でした。「ルカによる福音書」だけではなく、他の「マタイ」「マルコ」「ヨハネ」それぞれの福音書にも、似たようなお話が書かれています。幽霊や亡霊かと思って、びっくりしている弟子たちに、イエス様は「触ってよく見なさい。霊には肉も骨もないが、あなたがたが見ているとおり、私にはある」(39)と言い、手と足を見せています。「ヨハネによる福音書」では、もっと具体的に「手の釘の跡、脇腹の傷跡」を触らせています(20:27)。それでもまだ驚いて、信じられず、不思議がっている弟子たちに対して、「ルカによる福音書」では、その場にあった「焼いた魚」を食べて見せられました(24:43)。

これらのことが私たちに伝えようとしている事は、何でしょうか。これらのお話から、私たちが分かることは、イエス様の復活、死からの引き起こしは、幽霊や亡霊、幻や夢ではない。単なる思い込みではなく、確かな現実であるということでしょう。それを 2000 年前の当時の人々の表現で、「手足を触らせる」「魚を食べて見せる」と書き記したのだと思います。そのような具体的な表現をするほどに、「夢や幻ではない」ということを強調したのだらうと思います。

もしも、イエス様の「復活」「死からの引き起こし」が、単純な肉体の蘇生だとしたら、鍵をかけて室内に閉じこもっていた弟子たちの所に、どうやって入り込んで突然現れた(ヨハネ 20:19)のでしょうか。また彼らの真ん中に立って語り出すまで、誰も気付かなかった(ルカ 24:36)のはなぜでしょうか。お墓の前でも、エマオでの途上でも、弟子たちはなぜ見慣れたイエス様の顔が分からなかったのか、などなど辻褃が合わないことばかりです。そして「マルコによる福音書」16章12節では、わざわざ田舎の方へ二人で歩いて行く弟子たちに「別の姿で現れた」と書かれています。つまり、同じ姿で、同じ肉体で蘇生したのではない。別の人となって、別の人の中にイエス様は今も生きておられる。そしてその「別の人」とは、今を生きている私たちの隣の人たちでもあり、また私たち自身でもあるということなのではないかと思います。

全ての人に与えられている神の子としての命、永遠・唯一絶対のものとして生かされている命、それが復活されたイエス様と共にある命であるということ。そのことを表現するために、イエス様の肉体は「別の人」であるけれども、「手足を触らせ

る」「魚を食べて見せる」と表現したのだらうと思います。ビデオの「巻き戻し」や「逆再生」のように肉体を蘇生させるような神様はいません。私たちの願いを叶えてくれるような神様を求めるのではなく、そのような神はいないという現実の中、それでもなおこの世界を創られた神のもと、その御手の中で、全ての者に命を与え、生かしてくれている存在があるということ、日々に共にいてくれているということに信頼して、歩みを進めて行くということなのだと思います。

「神の前で、神と共に、神なしに生きる」それは、神様に創られ生かされている者として、自分の都合で神を利用しようと求めるのではなく、むしろ神様の求めに従って歩むということではないでしょうか。ロシアとウクライナの戦争は、依然として続けられていますし、その他の紛争地域でも、なお多くの血が流されています。先日15日には、9ヵ月前の安倍晋三元首相の暗殺事件(2022年7月8日)に引き続き、岸田首相を狙った襲撃事件もありました。社会の闇が更に深くなり、絶望がますます広がってしまっているように感じます。しかし、たとえ「神も仏もあったものか」としか思えなくても、人の目には絶望しか映らなくても、真っ暗闇にしか見えなくても、その中に命の神の復活は秘められています。「闇から光へ」「死から復活へ」。イエス・キリストの死からの引き起こしを覚えるこの時、私たちは「神の前で、神と共に」、そして私たちに利用可能な神を求めるのではなく、神様から用いられるものとして、変えられながら、歩みを進めて行きます。